

友だちとの関わりを楽しみにし、進んで活動する子

～苦手な買い物学習をとおして～

高木 雅子

はじめに

S男は、小学校より本校中学部へ入学して来た生徒である。同じ小学校からの友だちや上級生、下級生がいないこともあり、一人で行動することが多い。活発な行動もなく、自分のことは自分でできるので、日常生活の中ではさほど問題になることはないように思えた。しかし、それは人との接触をなるべく避けようと自分の周りに壁を作ったり、自分に関係のないことは知らないといった自己中心的な考え方をしているS男の姿でもあった。

そこで、S男の周りの壁を少しずつ崩していき、社会との接点を多く見つけることが必要と考えた。そして、その接点を学校や家庭につなげていくことが卒業後の本生徒の社会生活に役立つものと考え、あえて苦手な買い物をその中心にすえた。

1 プロフィール

(1) 生育歴

- ・昭和56年8月2日生 15歳6か月 中学部3年 男子
- ・自閉症 ・両親、兄、祖母の5人家族

(2) 諸検査による実態

- ・知能検査 IQ47 (言語性45以下 動作性57) WISC-R
- ・S-M社会生活能力検査

表-15 S-M社会生活能力検査

SA8:6

他に比べ、意志交換、集団参加、自己統制の領域が低い。

- ・自分づくりの段階
自制心の形成期と思われる。

(3) 楽しんでいる姿の特性

- ・休憩時間は、自転車乗り、ボール遊び、音楽鑑賞のどれかを一定期間続ける。
- ・一人で遊んでいるが、「〇〇君がおったなあ。」という言葉をよく言う。つまり、いっしょに何かをするということはないが、その場所でいっしょに時間を共有している友だちを意識している。
- ・さまざまな活動場面では、誰と一緒にのかを大変気にし、友だちの名前を聞いて安心して活動を続ける。
- ・日程表、行事表、学級通信等のプリントを見て、これから先にあることを知って安心して活動する。
- ・自分を受け入れてくれる人には何度も同じことを言って、反応を楽しむ。
- ・農作業に喜んで取り組む。

領域	領域別社会生活年齢
SH 身辺自立 Self-Help	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
L 移 動 Locomotion	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
O 作 業 Occupation	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
C 意 志 交 換 Communication	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
S 集 団 参 加 Socialization	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15
SD 自 己 統 制 Self-Direction	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

2 取り組みの構想

(1) 指導仮説

自分の殻に閉じこもりがちなので、身近にいる友だちに接し、友だちから刺激を受けることで外に目を向けさせたいと考えた。

<めざす像>友だちとの関わりを楽しみにし、進んで活動する子

<つけたい力>相手の話をよく聞き、正しい応答をする。
友だちと協力する。

<題材と支援>学級のみんなで決めた品物を、買い物係となって買い物する。
お金の計算は電卓を使う。
品物をメモしておく。

これまでのS男の自主的な活動を見ると、委員会や係で決められた当番活動、朝の会・帰りの会の司会、そして日常生活の中で毎日やっている歯磨きや掃除、着替え等、パターン化されたものである。未経験のことや変更の可能性のあることには、何度も何度も確認してから行動に移すことが多い。そこで、先の見通しが持てるようあらかじめ学級全体でよく話し合い、何のために買い物に行くのか、何をかうのか、S男以外の生徒は何をするのかなどを確認しておくことが大切である。自分の買ったものを調理する。その調理したものをみんなで会食するといった見通しの持てる計画を立てることと、同じ店に買い物に行くという経験の積み重ねが、S男を社会に目を向けさせるきっかけとなるのではないか。また、それが定着してくれば、次へのステップとしてそのパターンを崩し、さらに高い目標を考え、行動の幅を広げていくことができると考えた。

(2) 指導方針

- ① 日々の活動の見通しが持てるように配慮し、今すべきことは何かを意識させる。
- ② 友だちの発表をよく聞かせ、それに対しての意見を持たせる。
- ③ まちがった応答の仕方をした時はその場で直させ、正しい言い方を定着させる。
- ④ 計算力をつけるとともに電卓の使い方を知り、お金の支払いができるようにする。

3 指導の実際

これまで、家族と買い物に行っても一人車の中で待っていることが多く、母親に「いっしょに行こう」と誘われても拒否するS男であった。また、学校でも学級のみんなで行くことがほとんどで、買い物の目的をS男自身が意識しなくてもよい状況であった。知らない所に行ったり、人と話すことをいやがるS男が買い物をする楽しみを知ってくれるよう、S男一人で買い物に行くことを約束した。一人ということは学級のみんなの代表であり、買い物をしないとみんなが困るという責任もあって、一人で行くことにより、買い物をするという自覚が生まれたように思う。そこで、少しずつ買い物への緊張もとけ、一人で行けるようになったS男の姿を、(1)課題学習でのお金の計算(2)生活単元学習「お客様をよんでティーパーティーをしよう」の取り組みの2つの場面からとらえてみた。

(1) お金の計算

主に課題学習の時間に個別指導することが多かった。S男の生活はお金とは無縁の生活で、お金を持って自分で何かを買うといった経験もなく、親に買ってほしいとねだることもない。そのためか、金種は分かっていても全部でいくらあるかという計算ができなかった。まず、千円までの計算に取り組み、数え足しで理解できるようになった。これは、何回か繰り返し練習するうちに定着したが、求められた金額がちょうどない場合、いくら出せばよいのかということにつまずいた。例えば、320円と言われたときに百円玉を5個出してしまったり、200円しか出さなかったりと金額の多少が実際のお金に結びつかなかった。そこで、買い物プリントを利用してS男と担任がお客さんと店員になり、いくら払えばよいのかを繰り返し練習した。その際、おつりも必ず数えるようにした。計算はこれからの生活に役立つことと利便性を考えて電卓を使用し、実際の買い物にも利用した。

(2) 生活単元学習「お客様をよんでティーパーティーをしよう」の取り組み

楽しみながら学習できるものはないかと考え、卒業を控えた学年ということを考えてお世話になった人達をよんでティーパーティーを開くことにした。一人ひとりの今の課題は何か、つきたい力は何かを考え、それに合った係になることにした。S男は前述したように買い物係である。買うものは学級のみinnで話し合い、ケーキ9個と紅茶になった。当日、S男はいそいそと笑顔で出かけて行き、担任はかなり後ろから後をついて行った。担任が店に入ったときにはもう買い物かごに紅茶が入っていて、ケーキを探しているところだった。ケーキを見つけると、すぐかごに入れようとするので数の確認をさせた。すると、9個必要のところ6個しかなかったのので、どうしたらよいか考えさせた。それでも買うと言い張るので、「S男君は我慢するんだね」と言う。「いやです」を繰り返すばかりであった。「みんなが食べられるように他のお菓子にしようか」と言うと、ケーキに似たお菓子を買った。レジの所では早くお金を払ってしまいたいというような焦りの行動が見られたので、落ち着いて支払いできるように声かけをした。支払いの時は余分なお金を出して、店の人に返される場面もあった。実際の場面では、教室と同じような落ち着いた行動がとれず、担任の援助を必要とするところがまだあることが分かった。



買物をしているS男

4 考察と今後の課題

買い物に行きだした初めの頃に比べると、表情も穏やかになり歩く速さも速くなった。これは買い物に対する抵抗感が少なくなってきた表れだと思う。初めてのことに對しては引込みがちで、自分からはなかなか出て行こうとしないが、常に心の安定が保たれるよう、励ましの言葉かけや後押しをしていきたい。この秋に校外のマラソン大会に参加し、また一つ自信をつけることができた。少しずつ社会に自ら喜んで参加することで、将来の「生活を楽しむ」基礎が育っていくことを願っている。